

02 Prologue 継承と、前進。

04 巻頭対談：今こそ、若き知の創造へ。

小林 誠 名古屋大学特別教授 独立行政法人日本学術振興会理事
濱口 道成 名古屋大学総長

12 特集：未来へ挑む勇氣 The Front of Research

始動 YLC Young Leaders Cultivation 名古屋大学若手育成プログラム

伊丹 健一郎 大学院理学研究科教授
大塚 雄太 大学院経済学研究科特任助教
坂野 晴彦 大学院医学系研究科特任助教
金 秀光 大学院工学研究科特任助教
中 竜大 素粒子宇宙起源研究機構特任助教

20 PICK UP：次代の名古屋大学を創る
未来を切り拓く勇氣を

22 国際化のさらなる進展
24 世界最高水準の研究を推進
26 新たな社会連携の構築
28 キャンパス整備の推進

30 大学概要

32 世界へ、羽ばたく。

継承と、前進。

時代の投げかけるさまざまな問いに、あるいは、社会にひそむ課題に対し、独自の視点から果敢に挑み、真理を探究してきた、名古屋大学。

既存の権威にとられない柔軟な発想を育む風土のもと、ノーベル賞受賞者をはじめとする優れた知識人を、各分野へ輩出し、その確固たる存在感を、世界に示してきました。

70年を越える、知の拠点としての伝統。

それは一朝にして成ったものではなく、

未踏域を進んだ先人たちの、勇気ある一步の積み重ねであり、

その志を継ぐ若き担い手たちの、新たな歩みが築きあげてきたものです。

どんなときも、時代の最先端で前進を続ける人がいるからこそ、

伝統は、次代へと受け継がれる。

名古屋大学は、常に若き力とともに、未来を切り拓いていきます。

今こそ、若き知の創造へ。

濱口 道成 Michinari Hamaguchi
名古屋大学総長

小林 誠 Makoto Kobayashi
名古屋大学特別教授・独立行政法人日本学術振興会理事

世界的な経済の低迷や長引く不況によって、かつてない逆境にある日本。
人を資源に発展を続けてきたこの国の未来は、今こそ、若い力にかかっています。
こうした動向を見つめて、名古屋大学では独自の若手育成プログラムをスタートさせるなど、
若き知の創造に向けて、これまで以上に支援の充実を図っています。
小林 誠名古屋大学特別教授を迎えて行われた濱口道成総長との対談では、
人材育成の課題から名古屋大学のあり方まで、さまざまな提言がなされました。



伝統である自由闊達な学風から、
何が中身として
生まれてくるかが大事です。



科学技術創造立国の転換点

濱口 日本は科学技術創造立国を重要政策に掲げて、国づくりを進めてきました。しかし、周辺の新興国が活気づく中で、日本の科学技術研究は転機を迎えていると思います。先生は科学技術振興の現状についてどのようにお考えですか。

小林 日本は今、厳しい状況に置かれています。新興国の中でも中国の成長は著しく、その勢いに押されているのは確かです。中国の大学には、国内外の企業から、かなりの投資が入っているとも聞きます。そこに加えて、日本は今回の東日本大震災によって、多くの大学や研究機関の実験設備が相当なダメージを受けました。電力不足の問題もあり、東日本全体で影響が大きいのではないかと危惧しています。当面はそこからの復旧・復興に全力を注ぐ必要があるでしょう。

濱口 震災の影響は、長期にわたるものになると予想されますね。投資面で言えば、日本の企業も、国内の大学より海外の大学へ投資しているという実感があります。しかもご承知の通り、GDP(国内総生産)比で見ると、日本の教育への公費支出は、OECD(経済協力開発機構)加盟国の中で最低です。

小林 日本は科学技術に対する国全体の資金は大きいのですが、企業の製品開発費なども含んだものです。ですから、大学に対する国の投資は、海外と比べて少ないですね。

濱口 応用分野に投資がシフトしているとも言えましょうか。宇宙や生命はどうなっているのかなど、根源的な人間の疑問に挑むような研究については、資金があまり出されていない。どんどんそこは細っているような気がいたします。先生は、日本全体の科学技術政策の課題をどうとらえていらっしゃいますか。

小林 ささまざまな施策はあるのですが、そこにバックボーンや哲学が感じられません。グランドデザインが欠如しているため、モザイクのように、あれもこれもやるといった感じに見えてしま

ます。グランドデザインに基づく、予算化までの一貫したスキームがないのが、一番大きな問題ではないかと思います。

人材育成に立ちはだかる課題

濱口 先生が研究を始められたころは、日本は貧しく、科学技術を世界の一流に発展させていけるような状況にはなかったと思います。しかし、それでも先生方の世代が伸びてこられて、日本をここまで引っ張っていらっしゃった。ところが現在は、科学技術が発展し、社会は豊かになりましたが、若い人たちがメンタルな部分で内向き傾向にあり、海外留学にも消極的という現状があります。若手をどう育てていくべきなのか、大学としても頭を悩ませているところです。

小林 我々が大学へ入ったころは、いわゆる理工系倍増というスローガンで、理工系の定員が倍になった時期なんです。しかし、それは一つの波であって、実は我々が大学院を出るころには波が過ぎ去り、大学教員の職が埋まって今度はポストがないという状況になってしまいました。そういうことを考えると、昔の政策が特に良かったとは思えません。ただ当時は、日本全体の経済が伸びていたということが大きい。今は停滞している状況ですから、同じことをやっているのは難しいでしょう。

濱口 大学は、科学技術創造立国を担う人材養成を使命としていますが、その教育には非常に時間がかかります。10年、20年かけて一人前になっていくプロセスがあり、ポスドク^{※1}、助教と各職位に応じたサポートも必要です。ところが、最近は人件費も科学研究費で補うものですから、プロジェクトが終了すると失職したり、次の仕事を探すために大変な苦勞をする。しかも、プロジェクトが終わるまでに成果をまとめなければならないので、短期的な仕事に走る傾向があって心配しています。

小林 そうですね。個別の研究課題ならばそれもあるかとは思

小林 誠

Makoto Kobayashi
名古屋大学特別教授
独立行政法人日本学術振興会理事

Profile

1944年生まれ。名古屋大学大学院理学研究科博士課程修了。理学博士。
素粒子理論を専門分野に、第5、第6のクォークに関わる
「小林・益川理論」を発表し、2008年ノーベル物理学賞を受賞する。
日本学士院賞受賞、文化功労者、文化勲章受章。
現在、日本学術振興会理事、高エネルギー加速器研究機構特別名誉教授、
名古屋大学特別教授、名古屋大学素粒子宇宙起源研究機構諮問委員会座長。

※1 / ポスドク
Postdoctoral Fellow の略。
博士号取得後、正規ではなく任期制の職に就いている博士研究員のこと。

いますが、グローバルCOEプログラム^{※2}のようなスケールの大きなものも、短期的な予算でくられてしまう。力を入れるべきプログラムについては、継続的な取り組みが可能になるようなスキームが必要かと思えます。

YLCプログラムのスタート

濱口 こうした状況を鑑みて、名古屋大学では独自の若手育成を目指すYLC (Young Leaders Cultivation) プログラムをスタートさせました。さまざまな条件を設けて若手研究者を募集し、審査を経て選抜された方を大学の自己資金で雇うものです。このプログラムで目指しているのは、文系も理系も同じサークル的な環境に所属し、若手同士で切磋琢磨していただくことです。それぞれの研究は所属学部で自由に展開しながら、一定のサイクルで顔を合わせてお互いの研究を発表し合うセミナーを行っています。昨年の募集時から大変な反響があり、個性的でクロスカルチャーの人材が集まったと感じております。

小林 すばらしい取り組みですね。任期はどのくらいですか。

濱口 まずは3年を目途とし、その間の仕事次第で5年まで延長可能としています。そして、必ず海外へ行っていただくことが条件です。YLCへの採用後、任期途中で他大学の教員に迎えられ人も出てくるなど、名古屋大学の若手の優秀さが認められたものと自負しております。

小林 私が理事を務める日本学術振興会でも、以前から特別研究員制度を設け、日本トップクラスの若手研究者のみなさんを採用しています。こうした支援の充実は良いことですが、ただ、国全体の施策で見たときに懸念しているのが、大学院生や若手研究者をサポートするシステムが複雑になり過ぎているのではないかと、ということです。研究者としての一步を踏み出すときに、制度によって有利不利が生まれるようでは、スタート時からランクがついてしまう。若いときは、まだ将来どうなるかわからないのですから、みんな同じスタートラインに立ったほうがいいのではないかと、シンプルに同じサポートを享受できる環境のほうが望ま

しいのではないかと、とも思っています。

濱口 やはり、一人ひとり成長のスピードが違いますし、人は環境や立場で意識が変わってくるものです。若い人には自由な環境を与え、自分をもっと伸びるかもしれないと希望が持てるチャンスを用意しておくといいと思います。また、研究成果は自分一人だけの力を出しているわけではなく、周りの環境や教授の指導もあるわけですから、それをすべて本人の能力の評価に一元化してしまうと、ズレが出てくるような気がいたします。

名古屋大学の個性を大切に

濱口 もう一つ、人材育成の面で気になりますのが、就職の問題です。海外では博士号を持った経営者の方も大勢いらっしゃいますが、日本の企業では博士号を取得した優秀な人材がうまく活用されていません。ポストクの高齢化もあり、どうしたら人材と企業をうまく結びつけられるのか、これも課題としております。日本では、学部を卒業あるいはマスターを修了した時点で、学生は

企業に入り、企業が短期的に育成するというシステムができあがっています。しかし、科学技術創国立国を目指すならば、新しいイノベーションにつながる技術を産業界の中でも展開できないといけません。そのためにはいろいろな技術、高度な知識を持った人材が、企業にも必要なはずなんですが。

小林 実際、博士号を持った人材を採用した企業は、彼らを高く評価していると思います。しかしながら、日本の風土の問題かもしれませんが、企業の多くに未経験のことを避けたがる傾向があるのではないのでしょうか。大学側も、これまで企業への就職に向けて積極的に教育してこなかったのが、それも今後の課題でしょう。

濱口 名古屋大学の学生を見ますと、大人しくてあまりしゃべるほうではないので、就職活動、特に面接でつまづくケースも多いようです。しかし、企業によっては名古屋大学の枠を確保してくださるところもあるんです。その理由は、実際に企業に入ると非常によく働き、30歳、40歳になって伸びてくる人が多いというこ



とで、実力を評価いただいています。

小林 確かに名大生はおっしゃる通り、自己顕示欲は、あまり強くないかもしれませんが。ただ、それも大学の個性ですから、それを貫くという考え方もあるのではないのでしょうか。私自身の経験を振り返ってみても、共同研究を長く続ける中で、周りの評価は自然と出てくるのではないかと感じております。

濱口 私も国際競争の中では、それがハンディになるかもしれませんが、そうした名古屋大学の質実剛健なスタイルをずっと貫いていくのも一つの道かもしれないと思っています。外側には表れなくとも、内に秘めた揺るぎない実力は、より深く周囲の信頼を獲得していくものではないのでしょうか。各国の研究者がひしめく国際的な競争環境の中で戦い、ノーベル賞を受賞された小林先生は、まさに名古屋大学出身者の真の強さを体現しているんじゃないかと思います。

基礎と応用を担う大学として

濱口 今後、名古屋大学が果たすべき役割について、お考えをお聞かせ願えますか。

小林 日本では、大学の個性の創出や大学間の競争がずっと叫ばれていますが、結局、新たな組織や制度を作りました、という外見の形でしか表に出てこないのは残念です。やはり、研究や教育の中身が出てこなければなりません。そういう意味では、名古屋大学はこれまでやってきたことを信じて、推し進めていけばいいと思います。伝統である自由闊達な学風から、何が中身として生まれてくるかが大事です。

濱口 名古屋大学の文化を大切にしていくということですね。先生は基礎研究の重要性についてもよくお話をされていますが、成果の見えやすい応用研究にシフトする動きがある中で、基礎と応用のバランスについてはどうお考えですか。

小林 科学技術全体から言えば、人類に役立つ技術への要請が大きな部分を占めています。それは当然のことと思いますが、そればかりに偏ってしまうと、ある種の脆弱性につながってくる。生物の進化と同じで、本質的に新しいものは一つ基礎へ戻らないと出てこないのではないのでしょうか。全体の構造、バランスを踏まえて、研究・教育がなされることが必要でしょう。

濱口 本当にそう思いますね。名古屋大学は歴史的にも地政学的にも、基礎と応用、両方を担っていかねばならない大学です。つまり、一つは日本の基幹大学として世界の最先端の研究と互角に勝負し、それを牽引できる人材を育てあげること。もう一つは、日本の心臓部にあたる中部地区の産業を支える人材、ひいては日本経済を背負っていく人材を、社会へ送り出すことが求められています。これは、この地域に生まれた名古屋大学ならではの特殊な役割だと思っています。

小林 大学の個性に通じるものかと思いますが、特に基礎研究の場合は、発想の多様性が大事だと考えています。研究者一人ひとりが受けてきた教育や取り組んできた研究内容など、少しずつ異なる経験があるからこそ、多様性は生まれるもの。名古屋大学で教育を受けたということは、ほかにはない何かを受け取っているはず。若い人たちは、それを大事にして自分を伸ばしていただきたいと思います。

濱口 名古屋大学の個性という意味では、応用現場を知る基礎研究者、基礎研究の知識を持った応用研究者を育む風土が、ここには広がっています。それは、日本がこれから目指すべき人材育成のモデルが名古屋大学にはある、と言えるのかもしれませんが。先生は、基礎研究に挑戦したいと思っている若い人たちに勇気づける存在です。先生の力強いお言葉を若い人たちに伝え、私どもは名古屋大学の個性を継承し発展させていきたいと思えます。本日は貴重なお時間をありがとうございました。

濱口 道成
Michinari Hamaguchi
名古屋大学総長

Profile

1951年生まれ。名古屋大学大学院医学研究科博士課程修了。医学博士。腫瘍生物学を専門分野に、癌関連遺伝子の構造と機能、癌細胞の腫瘍特異的な増殖制御機構や浸潤・転移の制御機構を研究。消化器癌の中で、最も治療が困難な胆管癌や難治乳癌の悪性転化機構を分子レベルで明らかにする。名古屋大学大学院医学系研究科附属病態制御研究施設長、名古屋大学大学院医学系研究科長・医学部長を経て、2009年名古屋大学総長に就任。

日本がこれから目指すべき
人材育成のモデルが、
名古屋大学にはある。



始動 YLC

Young Leaders Cultivation
名古屋大学若手育成プログラム

YLCとは

名古屋大学では、将来にわたって研究・教育を継続的に発展させるためには、質の高い若手研究者の層を厚くしておくことが重要であると考え、2010年度より名古屋大学若手育成プログラム（YLCプログラム）を開始しました。このプログラムに応募するには、本学の大学院博士課程後期課程または博士課程を修了（予定）し、留学経験がある、もしくは採用期間中に留学することなどが条件となり、厳しい審査を経て認められれば、原則3年任期の助教として採用されます。今回は、大学院理学研究科・伊丹健一郎教授を司会に迎え、4人のYLC教員の皆さんに、プログラムの魅力や今後の展望を語り合っていました。



坂野 晴彦
Haruhiko Banno
大学院医学系研究科特任助教
1973年生まれ。名古屋大学医学部卒業後、名古屋第二赤十字病院を経て、名古屋大学大学院医学系研究科博士課程修了。医学博士。2010年度YLC採択。研究テーマは、神経変性疾患の治療法開発への医師主導治験の推進。

大塚 雄太
Yuta Otsuka
大学院経済学研究科特任助教
1982年生まれ。名古屋大学大学院経済学研究科博士課程後期課程修了。経済学博士。2010年度YLC採択。研究テーマは、近代ドイツ思想史の再構築—ドイツにおける道徳哲学の受容と展開をめぐる社会思想的コンテクストの形成。

伊丹 健一郎
Kenichiro Itami
大学院理学研究科教授
1971年生まれ。京都大学大学院工学研究科博士後期課程修了。工学博士。名古屋大学物質科学国際研究センター准教授を経て現職。専門分野は有機合成化学。ナノレベルでのものづくりに挑む。文部科学大臣表彰若手科学者賞など受賞多数。

中 竜大
Tatsuhiko Naka
素粒子宇宙起源研究機構特任助教
1983年生まれ。名古屋大学大学院理学研究科博士課程後期課程修了。理学博士。2011年度YLC採択。研究テーマは、高分解能原子核乾板を用いた宇宙暗黒物質の到来方向検出実験プロジェクトの推進。

金 秀光
Shuko Kin
大学院工学研究科特任助教
1979年生まれ。中国・西安交通大学卒業後、日本へ留学。名古屋大学大学院工学研究科博士課程後期課程修了。工学博士。2010年度YLC採択。研究テーマは、大電流・超低エミタンス・短パルス電子源の開発。

若きリーダーを育てる名古屋大学の独自戦略

3年間で見つける研究の光

伊丹 YLCは名古屋大学独自の戦略的な若手育成プログラムとして、非常に注目を集めています。現在、皆さんはYLC教員として活動されているわけですが、YLCのどのような点に魅力を感じて応募したんですか？

金 専門分野は半導体の結晶成長です。材料分野の研究は日本が進んでいるので、中国の大学を卒業後、名古屋大学の工学研究科へ進み、現在はナノレベルで結晶を制御して新物性の発現を研究しています。YLCは自分でテーマを決めて研究を続けることができ、任期も3年あるので、期間内に一つの研究ができるのではないかと考えたんです。

坂野 6年間の臨床トレーニングを経て、医学系研究科の神経内科学講座へ戻りました。そのころ見つかった神経変性疾患への新しい治療法を臨床応用するために、臨床研究に取り組むようになったんですが、さらにチャンスを広げるためにYLCに応募しました。もともと大学院時代に留学も視野に入れていたため、1年以上の留学が必須とされている点も魅力でした。

大塚 同じく留学の義務づけが、応募のきっかけでした。私は18世紀のドイツ思想史を再構築しようと研究を続けてきたんですが、200年程前のドイツ語文献を分析するには、単なる語学力以上に、それをどう読むかが重要なんですね。そのため、大学院時代は留学に至らなかったんですが、自分の研究が世界的なレベルでどんな位置づけになるのか、試してみたいと思うようになったんです。

中 私も同じですね。海外での研究を志望していたので応募しました。専門とする素粒子実験は、一人でできる研究は少なく、大きいものと数百人規模のプロジェクトが当たり前になっている分野です。ただ、私はそうしたビッグプロジェクトに入るのではなく、自分でプロジェクトを作りたいという意識をもって研究を進めてきました。YLCの支援内容は、そうした私の目標を後押ししてくれるものだと思います。

伊丹 今、皆さんが挙げられたYLCの特色は大きく二つ、海外留学の義務づけと任期3年です。その中でも海外留学は、とても重要なポイントだと僕は思います。日本に住み心地が良く、研究

環境も整っていますが、海外に出れば世界のいろいろな人とふれあうことで視野が広がり、帰国後の研究姿勢がまったく変わるはず。一方の任期3年は、3年もあると安心するのか、3年しかないと感じるのか、どちらでもとれるわけですが、やはり期間が限られているという意識で確実に次のステップにしていきたいですね。ただ、3年間で完結するような小さな物語は、それでおしまいです。3年の後、少なくとも10年は持続するような種、光を見つけてほしいと思います。



異分野の若手が切磋琢磨する

坂野 採用者同士が交流できるYLCセミナーも、YLCの大きなメリットだと感じました。医学部は単独で鶴舞キャンパスにあるため他分野の人とふれあう機会が少ないのですが、定期的開催されるセミナーで互いの研究を紹介し合うことが楽しく、文系や理、工学部の人たちが純粋な学問に打ち込んでいることにも刺激を受けました。私は医学部で応用分野ですから、直接、役に立つことを考えるのが当たり前のように感じていたのですが、もう少し視野を広げて純粋に真理を追求してもいいのだと考えるようになり、モチベーションも上がりました。

伊丹 それは重要なことですね。自分の研究内容や取り組みを

伝統を継ぎ、超えていく、新しい開拓者たち

広く伝える努力をしていくのは、研究者・教育者のミッションの一つです。しかし、他分野の人には、非常に本質度の高い、短いエッセンスで中身を伝えないとわかってもらえません。YLCセミナーで皆さんが集まって話をするのは、研究者としてのレベルを上げるための絶好のトレーニングになると思います。

大塚 確かにそうですね。私は文系ですが、セミナーで理系の方々がなぜその研究に進まれたのかを語ってくださることで、自分自身のテーマ設定に関して多様な方向から刺激を受けています。それは間違いなくYLCのメリットです。



金 研究費を自分でどう配分して使うかを定められるのも、独立した研究者になるための最初の一步だと思います。また、学生さんに実験などをやっていただくために、助教として自分で提案したり指示したりという部分で、これまでとは意識も変わりました。まだまだ教授の指示をいただくなど自分の考えだけではできていないんですが、今後は自分の考えでプロジェクトを作って、進めていきたいと思っています。

中 私も一番変わったのは研究に対する意識です。今までは自分のテーマを解決しようと、自分自身の研究だけを考えてやってきたわけですが、YLCではプロジェクトの推進をテーマに掲げていますので、いかに学生を指導していくか、いかに共同研究者と研究を推進していくかなど、プロジェクト全体を見なければいけません。それに伴って研究をアピールして資金を獲得してこなく

てはいけない、という意識も高くなりました。

大塚 もう一つ、YLCには何の束縛もなく、自由に研究に専念してもいいという空気があふれています。だからこそ10年、15年というスパンで自分の基礎的な研究テーマとなるものを、ダイナミックに設定できることは非常に大きいと感じています。

継承から、次の革新へ

伊丹 YLCに採用されるためにはヒアリング審査の突破が必要ですが、皆さん、どんな点をアピールしたんですか？

中 私の研究は長いスパンでの取り組みが必要で完結した成果はありませんので、これまでの業績ではなく、むしろ今後のビジョンを明確に話すことに重点を置きました。また、私が使っている原子核乾板は、名古屋大学が高いオリジナリティを発揮して開発してきた検出器です。この分野では世界トップの技術の蓄積があり、そこからさらにブレークスルーして、より良いものを開発していきたいとアピールしました。

大塚 伝統の継承という点は、私も強調しましたね。そのとき、「継承が必要なのか？」と問われたんですが、世界的に見ても思想史研究の拠点である名古屋大学の蓄積を継承した上にこそ革新がある、と自分の熱意を伝えました。また、私の場合は、ドイツ語での論文発表が採用の条件であるをご指摘いただきました。思想史の分野で論文を書くには、自分のものの考え方そのものが問われますし、言葉をめぐる概念の変節の歴史、翻訳によるニュアンスの変化などの検証課題もあって量産はできないんです。しかし、論文発表への挑戦を促され、より世界を意識して意欲を高めるきっかけになりました。

坂野 皆さん、やはり想定外の質問を受けていますね。私が一番印象に残っているのは、一通りの説明の後に投げかけられた「あなたは将来、何になりたいんですか？」という質問です。一瞬、ハッとしましたが、認知症も含め神経変性という病気の治療を考える上で、とても大切な臨床研究を今後も進めていきたいと、自分の想いを迷うことなく伝えることができました。当然ですが応募の前には、自分の中で自分の考えを完成させておくことが重要ではないかと思っています。



金特任助教は有機金属気相成長装置を用いて、世界最高性能を持つ半導体デバイスの作製に取り組む。

世界を相手に研究を展開する

金 私がドキリとさせられたのは、研究成果で世界最高のデータが出ましたと説明したところ、「あなたがいなかったら、その結果は出なかったんですか？」と聞かれたことです。確かに、ほかの人でも成功する可能性はあるんですね。そのときに思ったのが、実験も大事ですが、次の一步は自分で研究のプロジェクトを立ち上げることが重要だということです。やはり、最初の提案がなければ、この成果もないし、私自身も研究していなかったわけですから、自分で新しいテーマを提案したいと、ますます思うようになりました。

伊丹 どんな分野でも、この人がいなかったらこうはならなかったという、かけがえのない存在になることが我々のゴールにありますよね。僕も研究室のメンバーに、そういう存在を目指そうと言っています。それはオンリーワンでユニークだという意味なんですけど、すばらしければナンバーワンも兼ねられる。みんなで、それを目指していきましょう。

より広い視野を得るために

伊丹 YLCでは若手研究者が国際的な経験を積むことも重視しています。皆さんはどのような留学計画を立てていますか。



金 私は中国からの留学生なので、当初YLCの基準である海外留学については考えていなかったんです。ただ、環境の変化が新しい発想を生むこともあるので、日本以外の国に行って、他分野の人と研究したい気持ちも強くなってきました。チャンスがあれば、海外で視野を広げたいです。また、中国から来て驚いたのは、日本では学生が自分で自由に実験装置を扱えるという点です。中国では教授以外は許されないで、日本の学生は研究環境にはとても恵まれていると思います。

坂野 私が専門とする臨床試験では、患者さんに薬を使って病態がどう変化するか薬効を評価していくんですが、この分野の研究はアメリカやイギリスが先行しています。そこで海外の研究機関で、病態の指標となるバイオマーカーをどう見出していくのか、そして、病気の仕組みを知るためにバイオマーカーをどう利用していくのか、といった部分を学びたいと思っています。まだ日本からは、臨床で役立つ薬が効率よく社会へアウトプットできていけませんので、そうした研究を通じて、将来的に認知症も含む神経変性疾患に対して、治療開発のお手伝いできれば、と思っています。

大塚 私の場合、ドイツに行くにしても、経済学の方ではなく、

人文系に行くつもりです。海外の研究書籍を読むと、例えば、哲学の研究者にしても民俗学や地理学など幅広いバックグラウンドがあって、オリジナルな研究に結実していることがわかるので、私も従来の枠から飛び出して別の分野で取り組んでみたいと思っています。また、社会思想史は日本が先頭立って開拓してきた分野です。日本独自の発想や問題提起の仕方が、海外でどの程度通用するのか、確かめてみたいとも考えています。



中 来年、イタリアの研究所で自分のプロジェクトを立ち上げたいと思っています。というのも、私の研究は宇宙から降る宇宙線に強く影響される実験なので、影響の少ない地下深くにあり、装置なども揃った研究所の環境が、プロジェクトの立ち上げには非常に効率がいいんです。既に海外のコラボレーターの方も興味を持ってくださり、国際共同プロジェクトを立ち上げる打ち合わせも始めたところです。

伊丹 名古屋大学では、文部科学省国際化拠点整備事業(グローバル30)の一環として、今年の10月から、学部1年次から英語で授業を行うプログラムがスタートし、外国人の教員も増えるなど国際化に向けて改革を進めています。YLCが名古屋大学の国際化に果たせる役割としては、皆さんが留学によって成長できた良い例になっていただくことだと思います。それが、次に続く人たちの心にも響き、国際舞台で活躍しようという意欲につながるのではないのでしょうか。

研究の次なる目標

伊丹 中さん以外の方はYLCに採用されて1年弱ですね。研究の進捗はどうか。また、皆さんの展望を聞かせてください。

金 これまでの研究を続けながら、同時進行している別の研究では他の研究機関も参画して、より大きなプロジェクトへ進展しようとしています。その一方で、自分で新しいテーマを見つけようと模索していき、これが難しく悩んでいます。

伊丹 僕の経験からして一番大事なのは、問題を解決することではなく、問題を見つけることです。「これが問題だ」と見つけれられたら、研究は半分以上できたようなもの。YLCの3年間は解決する期間ではなく、見つける期間だと思いますよ。

大塚 私は人文社会科学系の研究者が集まる学際的な学会で論文を出し、そこで文学や美学の方々と接点ができたので、今後は人文系とタイアップした社会思想史を構想していけるのではないかと考えています。また、名古屋大学にはイギリス、フランス



社会思想の古典が並ぶ中央図書館内の水田文庫。
大塚特任助教は近代ドイツ思想史の新しい知的起源を探る。



素粒子などの飛跡の検出に使われる原子核乾板を製造・開発するために、装置で作業をする中特任助教。

研究者・教育者として、一段上のステージへ

思想史研究の第一人者の先生方がいらっしゃるの、私がドイツからアプローチすることで、英仏独という思想史の大きなパラダイムを構築していくのが目標です。

中 私は今年度からのスタートですが、自分のプロジェクトを実現する中で、一つの技術にとらわれないまったく新しいコンセプトの提案を目標としています。素粒子物理以外の方からのアドバイスによって課題を解決してきた経験から、多様な分野に自分の技術が展開できるのではないかと感じていて、純粋な学問以外にも、社会の役に立つ技術を開発していきたいと考えています。

坂野 研究は切れ目なく続いていくもので、これがYLC採用後の成果です、とは言えないのですが、まずは、今までやっていたものの集大成として論文を出しました。今後はYLCセミナーで、自信をもって発表できる成果を出していきたいです。

伊丹 僕が研究発表の審査をするとき、研究の本質度が高いかどうかを判断するため見るの一点、1枚のスライドで研究が表現できているかどうかということです。皆さんにはプログラム終了後、1枚で自分の位置、向いているベクトルを宣言できるよう努力してほしいですね。それには毎日、エッセンスは何か?と考えることが大事だと思います。ある日、突然、視界が開ける瞬間が必ずある。そのときが人間としても、研究者、教育者としても一段上に行く瞬間だと思います。

教育者としての成長

中 教育面では、私は指示待ちではなく、自主的にどんどん研究を進めていくような後輩を育てたいのですが、試行錯誤の段階です。皆さんにアドバイスをいただければうれしいです。

坂野 先日、ファカルティディベロップメントの講座に初めて出て、学生とのコミュニケーションを深めるために、講義や実験の終了後もしばらく教室にいた方が良かったなど、まったく気づかなかったことがいろいろとわかりました。助教になったことで、与えられた仕事に取り組むのではなく、先を見通してプランニングするなど、後輩たちの指導に目が向くようになりましたが、私も教員としての勉強をさせてもらっている段階ですね。



金 研究成果がきちっと出ないと、学生はやる気を失ってしまいます。そこで、成果が出るようサポートする一方で、独立した考えをさせることも重要なので、学生たちとはちゃんと話し合っていますね。その中で、学生には自分なりの考え方を育ててほしいと思っています。

大塚 私の場合、講義の前に「過去とは何か」など、必ず問いを出すことにしています。昔の思想家と自分たちとの間にオーバーラップする問題があると感じてもらうことが重要で、自分自身で考えることで新たな可能性が生まれることを実感してほしいのです。私自身が何かしら学生を刺激できる存在となることで、長い目で見て、私の成果ではなく、彼らの成果として実を結んでくれればいいと思います。

伊丹 大学に関わる者の最大のミッションは、いい人材をプロデュースすることです。人を成長させるには、やはり大きな問題を一緒に解決していくプロセスが大切で、研究と教育は絶対につながってきます。教育で一番重要なのは、後輩たちをインスパイアすること。そのために我々ができるのは、彼らが自ら学ぼう、成長していこうとする場を整えてあげることです。そして、自分よりも優れた後輩を育てられたら、大成功でしょう。皆さん、研究者として教育者として、ぜひ、かけがえのない存在になってください。活躍を心から応援しています。



臨床試験・臨床研究について講義を終えた坂野特任助教。附属病院内で学生に引き続き指導を行うことも。

次代の名古屋大学を創る

世界屈指の教育研究拠点として、

さまざまな活動を展開する名古屋大学。

より世界の最先端へ、より社会のまん中へと、

活動のフィールドを広げ、

地域性豊かな取り組みの強化も図っています。

未来を見すえて、次代の知を創造し続ける、

名古屋大学の最前線を紹介していきます。

未来を切り拓く勇気を

日本という国が、未来へ向けてどのように生きていくのか。

その知恵と力が試されている今、

日本の高等教育機関として、中部の基幹的総合大学として、

名古屋大学もまた真価を問われるときを迎えたと感じています。

私は大学運営の指針として濱口プランを掲げ、

「名古屋大学からNagoya Universityへ」をテーマに、

世界に通じる人材の育成、世界トップレベルの研究推進、

地域連携・地域貢献の推進などに取り組んできました。

今あらためて、その改革の信念を強く抱き、

今後も研究や教育、国際化、社会連携などにおいて、

新たな試みに挑んでいくつもりです。

未来を切り拓く勇気を胸に、名古屋大学はたゆみなく、

新しい時代へと歩みを進めていきたいと思います。

名古屋大学総長 濱口 道成



国際化のさらなる進展

日本の大学の国際化が叫ばれる中、名古屋大学はアジアの体制移行国への法整備支援や医療行政官を育てるヤング・リーダーズ・プログラムなどを通じて、早くから国際交流を進めてきました。現在は、国際的に活躍できる高度な人材養成を目的とする文部科学省国際化拠点整備事業(グローバル30)の拠点大学として、新たな活動にも挑んでいます。国際化へのさまざまな動きの中から、ここでは注目の取り組みについて紹介します。

日本の大学の国際化拠点 名古屋大学ウズベキスタン事務所

2010年3月、本学はウズベキスタン共和国タシケントに名古屋大学ウズベキスタン事務所を開設しました。同事務所は、グローバル30の採択拠点である本学が運営するものですが、「海外大学共同利用事務所」としても指定されています。

その背景にあるのは、本学とウズベキスタン共和国との長い交流の歴史です。これまでにサマルカンド国立大学、世界経済外交大学とは部局間学術交流協定を締結。タシケント国立法科大学とは大学間学術交流協定を結び、法整備支援の一環として日本法教育研究センターを設置するなど、現地に確かな礎を築いてきました。こうした実績を糧に同事務所は、日本の大学を代表する窓口として各大学の魅力を発信し、留学生の募

集業務を支援するなど幅広い活動を展開しています。

同事務所の開所式とシンポジウムには、日本・ウズベキスタン両国の関係者ら約200人が出席。今後の発展を期す盛大なものとなりました。現地では同時に、名古屋大学全学同窓会ウズベキスタン支部設立総会を開催し、ウズベキスタン人卒業生らとのネットワーク強化も図っています。

国内でも同事務所の開設を記念して、2010年9月、名古屋大学ウズベキスタン留学生会、駐日ウズベキスタン共和国大使館との共催でウズベキスタン・日本学生学術フォーラム2010を開催しました。これは日本のウズベキスタン留学生同士の交流を深めることを目的に、本学留学生からの提案で実現したものです。フォーラムの開催に合わせて、世界経済外交大学との大学間学術交流協定も締結しています。



名古屋大学ウズベキスタン事務所開所式

アジア各国での交流活動 モンゴルとのパートナーシップ

ウズベキスタン同様、本学が20年近くにわたって交流を続けてきたのがモンゴルです。2009年9月にはモンゴル国立科学技術大学と大学間学術交流協定を結び、同大学に名古屋大学フィールドリサーチセンターを設置。現地でのフィールド調査を一層支援する体制が整いました。

また、2011年2月には城所卓雄 駐モンゴル日本国特命全権大使をお迎えし、特別講演会「モンゴルから見た日本 日本から見たモンゴル—よりよいパートナーシップ構築のために—」を開催しました。日本にとってアジア各国の重要性が増す中、現地での活動が高く評価されている本学は、今後もアジアでの交流をリードする役割を果たしていきます。



城所大使を迎えての特別講演会

欧州の高等教育機関と連携 名古屋大学ヨーロッパセンター

一方、ヨーロッパにおいては、2010年5月、ドイツ南西部フライブルクに名古屋大学ヨーロッパセンターを立ち上げました。大学間学術交流協定校であるフライブルク大学の協力を得て設置されたもので、研究・教育、国際交流などを推進する拠点として活動を展開しています。

本学は、これまでも積極的に留学生を受け入れてきましたが、2011年度からは英語のみで学位取得可能なコースを開設。より広く門戸を開くプログラムを充実させています。こうした取り組みを受けて誕生した同センターは、本学と各国の大学や学術機関との連携を促進し、ヨーロッパにおける本学の存在感を高めていくはずと見られています。



名古屋大学ヨーロッパセンター開所式

留学生支援の強化 インターナショナルレジデンス山手

学内では、留学生を支援する生活環境の整備も進めています。2010年3月には新たな留学生専用宿舎として、国際交流会館「インターナショナルレジデンス山手」が竣工しました。隣接する国際嚶鳴館(日本人と留学生との混住型宿舎)とともに、学生同士の活発な国際交流の場となっています。

本学には、2011年5月現在、世界76の国と地域から1,556人の留学生が在籍しています。今後も国際化拠点大学にふさわしいキャンパス形成に努めながら、留学生の受け入れ態勢を強化していく予定です。



インターナショナルレジデンス山手

長年、交流を続けてきたアジアから、新たな一歩を踏み出したヨーロッパまで。本学の国際化への取り組みは、いよいよグローバルなスケールへと拡大しつつあります。アジアにおける活動のように、今後はさらに多くの国や地域で本学の独自性を発揮し、世界に開かれた教育研究組織として次代を目指していきます。

世界最高水準の研究を推進

名古屋大学は、「創造的な研究活動によって真理を探究し、世界屈指の知的成果を産み出す」という目標を学術憲章に掲げ、さまざまな分野において世界最高水準の知を追求してきました。今後は、本学関係者4人のノーベル賞受賞に代表されるように、脈々と受け継がれてきた高度な研究力を、いかに次代に継承し発展させていくかが課題です。世界での研究競争が激しさを増す中、本学の研究推進の取り組みについて紹介します。



看板上掲式の様子(左から、瀬口総長、益川機構長)

益川特別教授が機構長に就任 名古屋大学素粒子宇宙起源研究機構

本学は、草創期から物理学分野において独創的な素粒子論研究を展開するとともに、素粒子・宇宙分野の実験研究を推進してきました。2008年のノーベル賞受賞に至った小林 誠特別教授、益川敏英特別教授による小林・益川理論も、その流れを受けたもので、現在の素粒子物理学の標準理論の確立につながる、偉大な研究成果の数々を創出しています。

こうして世界の素粒子論研究をリードしてきた伝統をさらに進化させるべく、2010年4月、名古屋大学素粒子宇宙起源研究機構が発足し、初代機構長に益川特別教授が就任しました。

同機構には、理論研究を中心とする基礎理論研究センターと実験・観測研究を主に担う現象解析研究セン

ターを設置。大学院理学研究科、大学院多元数理科学研究科、太陽地球環境研究所から、優れた実績を持つ研究者たちが両センターに集まり、益川機構長のリーダーシップのもと密接に連携を取りながら、新たな発見を目指して研究を進めています。

2011年春からは、新設されたES総合館を舞台に研究活動を本格化させ、本学独自のアプローチで現代物理学に革新を起こそうとしています。

超高压電子顕微鏡施設 「反応科学超高压電子顕微鏡」を開放

素粒子論研究と同様に、国内では他に先駆けて本学が進めてきたのが、電子顕微鏡の研究開発です。これまでに超高压電子顕微鏡などを開発し、世界の注目を集めるさまざまな成果を上げてきました。

特に、今後の研究を加速させるものと期待されているのが、名古屋大学エコトピア科学研究所が超高压電子顕微鏡施設に設置した「反応科学超高压電子顕微鏡」です。同顕微鏡は、ガス環境下での各種反応をその場で観察できる世界最高水準の装置で、本学と日本電子株式会社が共同開発しました。世界トップレベルの超高压電子顕微鏡装置の常時保有を目的に、本学を含む国内5機関が設立した連携共同利用設備群「超高压電子顕微鏡連携ステーション」において、本学は先導的な役割を果たしていきます。

2010年10月、同顕微鏡がいよいよ全国のユーザーに共同利用装置として開放され、オープニングセレモニーが挙行されました。式典の後には、国際ワークショップや施設見学会、祝賀会を開催。学内外の関係者から、装置の利用が進むことで、より一層の研究開発や科学技術の進展に貢献できると、熱い期待の声寄せられました。本学は、超高压電子顕微鏡施設が誇る世界最高レベルの研究環境を広く提供することで、今後も日本の研究力向上に貢献していきます。



反応科学超高压電子顕微鏡

女子中高生向けのフォーラムを開催 女性研究者の育成と支援

本学は、学内に保育所を設置するなど女性研究者の研究環境を整え、仕事と育児の両立を支援しています。

2010年度の文部科学省科学技術振興調整費「女性研究者養成システム改革加速」に採択された、本学の女性研究者支援事業「名古屋大学方式 女性教員採用加速・育成プログラム」では、女性枠による公募や発展型ポジティブ・アクションプロジェクトなどを実施。女性教員増加を目指すとともに、そのキャリア継続、キャリ



女子中高生理系進学推進セミナー

アップのための多様な支援を展開しています。

また、取り組みの一つとして、若手女性研究者サイエンスフォーラムおよび女子中高生理系進学推進セミナーを開催。2010年は、県内外から女子中高生とその保護者、中学・高校の教員など約130人が来場し、本学の森 郁恵大学院理学研究科教授、平林智子大学院工学研究科助教などによる特別講演、若手女性研究者によるポスターセッションに耳を傾けていました。

さらに、理系女子学生のコミュニティ「あかりんご隊」が、女子学生や女性研究者の交流会、子ども向けの科学の催しを行うなど、さまざまな活動を通じて理系女子の進路選択や夢の実現を応援しています。



ホームカミングデーでのあかりんご隊の活動

自由闊達な学風のもと、研究者の独創性を尊重し、支援してきた名古屋大学。先人の足跡に学び、新たな道を開拓してきた後輩たちによって、今日では世界に冠たる研究拠点へと成長しました。今後も、さまざまな壁を越える研究推進、研究者育成を図り、世界に新たな発展をもたらす研究成果を創出していきます。

新たな社会連携の構築

社会貢献を重要な責務の一つと考える名古屋大学では、社会貢献人材育成本部にビジネス人材育成センターを置き、全国の大学院生や博士研究員を産業界へ送り出してきました。また、航空機開発DBT(Design Buildup Team)リーダーシップ養成講座を開設し、この地域の航空機産業を担う人材育成を行うなど、地域社会との連携を推進しています。拡大し続ける連携活動の中から、新たな取り組みについて紹介します。

産学官民で自然災害の被害軽減 名古屋大学減災連携研究センター

本学が位置する東海地方は、東海地震・東南海地震・南海地震の連動発生が予想され、過去には伊勢湾台風や東海豪雨などの風水害でも甚大な被害に見舞われてきました。そこで本学では地域の防災力を高めるために、災害対策室が中心となり地域社会との交流を深めてきましたが、2010年12月、大規模地震や風水害などによる被害軽減に一層貢献するため、名古屋大学減災連携研究センターを設置しました。

同センターには、学内から自然災害科学や防災工学、救命医学などを専門とする研究者が集まり、学問分野や組織を越えて連携研究を推進。減災戦略モデルを構築するとともに、これまでに築いてきた地域社会とのネットワークをさらに強化して、産学官民の連携のもと、

安全で安心な社会の実現を目指しています。

2011年3月11日、東日本大震災が発生しました。本学では、同月末に減災連携研究センターシンポジウムを開催し、今後の備えや減災への取り組みをさらに強化していくことを確認しました。

高大連携の防災教育を推進 「高校生防災セミナー」

大災害時には公助の力が不足するため、自助・共助の力で立ち向かう必要があります。本学は以前よりこうした意識をもって災害対策を進めており、2010年7月から8月にかけて、愛知県教育委員会と連携し、高大連携高校生防災教育推進事業「高校生防災セミナー」を開催。高校生が大人になったとき、自立して活動できる防災リーダーに成長してもらうため、災害発生メカ



高校生防災セミナー

ニズムに関する講義、災害図上訓練などを行いました。

セミナーには県内15校から高校生・教員75人が参加。参加者は防災活動のアクションプランを作成し、それに基づいて2学期から各学校で防災活動を実践、年末には活動成果発表会を開催しました。今後は、小・中学校や地域での防災活動を主導する、高校生防災リーダーとして活躍していただく予定です。



名古屋大学減災連携研究センター開所式

次世代自動車や航空機の開発 地域産業との連携

地域とともに歩んできた本学は、その強みをさまざまな分野で発揮しています。2011年1月には、環境に優しく、安全・安心な交通手段および交通システムを研究開発する国内最大規模の拠点、名古屋大学グリーンモビリティ連携研究センターを開設しました。

東海地方は世界有数の輸送機器産業集積地であり、その未来を支えるグリーンモビリティに関連した学術領域は、材料工学、機械工学、電気工学、社会科学など多様な分野へ広がっています。そのためセンターでは、学部や専攻など従来の枠組みを越えて、さらには産学



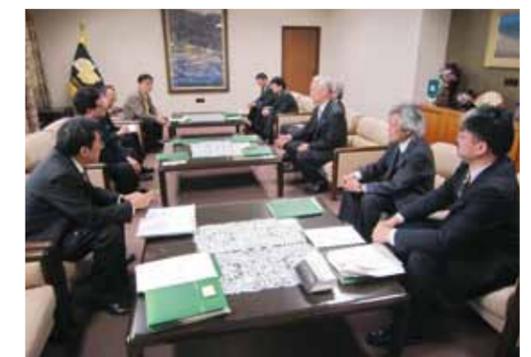
グリーンモビリティ連携研究センターが拠点を置くグリーンビークル材料研究施設

や学学、国際連携を先導しながら融合研究を展開。世界トップレベルの研究拠点を構築し、国際的に活躍できる研究者・技術者の育成を担っていきます。

また、地域の航空機産業の発展を目指し、「航空機開発DBTリーダーシップ養成講座」を開設。メーカーやサプライヤーなどが参加する共同開発チーム・DBTで活躍できる人材を育てるため、2010年6月には実証講座を2011年6月には本講座を開講し、取り組みを本格化させています。

地域社会や途上国への貢献 産官との連携協定締結

本学は、地域や世界での社会貢献を推進するために、地元企業や国際機関との連携も加速させています。2010年5月には、中日本高速道路株式会社(NEXCO)と包括的連携協力協定を締結。技術分野のほか地域活性化などの面からも共同研究を進めています。12月には、開発途上国で開発援助をしている国際協力機構(JICA)と包括的連携協力協定を締結。本学は今までもJICAのプロジェクトに協力してきましたが、今後はさらに強い連携のもと、途上国支援に取り組むなど、さまざまな分野において社会連携活動を展開しています。



国際協力機構との意見交換

現代の大学は、教育研究機関であると同時に、社会貢献を担う拠点としての役割も求められています。名古屋大学では産学官民連携を推進し、知的成果をあらゆる分野へ還元していくほか、教育を通じて地域社会を担う人材を輩出。今後も社会との連携を大切に、地域で、世界で、その役割に応えようとしています。

キャンパス整備の推進

名古屋大学は、次代を担う若者たちを育て、世界屈指の研究成果を生み出す教育研究環境を構築するためにキャンパス整備を進めてきました。豊かな緑と広大な敷地を誇る東山キャンパスでは、設備の充実した新施設が完成し、キャンパスに新たな交流の場を生み出しています。キャンパス内には、市民の貴重な財産でもある近代建築が建ち並び、これらの保存・活用にも取り組んでいます。また、医学部の拠点である鶴舞キャンパスでも再開発を進め、一定の完成を見ることができました。ここでは、新設された建物を中心に、キャンパスの伝統と未来を感じる教育研究施設を紹介します。



名古屋大学のシンボル豊田講堂が 国の登録有形文化財に

2011年7月、名古屋大学豊田講堂が、国の登録有形文化財(建造物)に登録されました。1960年に東山キャンパスに竣工した豊田講堂は、講堂や会議室、広場を持つ本学の中心施設です。世界的な建築家・槇文彦氏の初期の作品で、1962年に日本建築学会賞を受賞。2003年には、DOCOMOMO(Documentation and Conservation of buildings, sites and neighbourhoods of the Modern Movement) JAPAN 日本近代建築100選に選定。今回の文化財登録でも次の点から、日本の建築の主流となるモダニズム建築の到達点を示すものと高く評価されています。

まず、装飾を極力排除し、建物の輪郭を強調して建築形態を量塊と空虚の組み合わせで表現する手法であること。

次に、建物全体がコンクリート打ち放しを基本とした仕上げであること。そして、大屋根を支える角柱を利用してピロティを設けていること。さらに、建物前面の広場からエントランスホール、ホワイエ、講堂へと進むと、「大空間→小空間→大空間」と規模が変化する空間構成の妙味が挙げられます。モダニズム建築の手法として、これらを個別に用いた建築は多くありますが、豊田講堂のように多数の手法を同時に使っているものは少なく、非常に高い価値を持っています。また、高度成長期の建築運動から生まれたメタポリズム建築の手法を用いているのも特色です。

当時、門も塀もなかったキャンパスに出現した豊田講堂は、都市と大学を結ぶ門、都市と緑地を結ぶ門としての役割を果たすことになり、完成から半世紀を経た現在も、多様な催事に利用される本学のシンボルとして愛され続けています。

エコキャンパスを具現化する 先進機能を備えたES総合館

工学研究科や素粒子宇宙起源研究機構、全学共用スペース、ノーベル賞展示室などから成る、名古屋大学ES総合館。低炭素エコキャンパス実現のために、国立大学では初めて全館LED照明を採用したほか、省エネに貢献する自然換気システムやドライミストなどを導入し、低環境負荷建築を目指しました。さらに、資源のサステナビリティにも配慮して、地元産スギ材による内装や木造駐輪場を設置するなど、地球にやさしいエコキャンパスに向けて、大きな一歩を踏み出しています。



先駆者たちの偉大な歩みを継ぐ 理学南館

理学部関係の建物の中心に位置し、研究室や大講堂、プロジェクトスペースなどを備えた、名古屋大学理学南館。大講堂は、4人のノーベル賞受賞者を育てた故・坂田昌一博士と故・平田義正博士の功績を讃えて、「坂田・平田ホール」と愛称がつけられています。ホールの入口には、ノーベル賞を受賞した野依良治特別教授、小林 誠特別教授、益川敏英特別教授、下村 脩特別教授など理学関係の偉大な先駆者の顔写真の入ったプレートが掲げられ、建物南側にはノーベルロードが整備されています。



安全性と快適性を高めた 体育館と武道場

トレーニング室やホール、剣道場、柔道場などを備え、建設以来、多くの学生や教職員が利用してきた体育館と武道場。建物の老朽化が進み、地震対策も必要となっていたため、改修工事を行いました。耐震診断に基づいて、それぞれの建物に適合した耐震補強を行い、安全性を確保するとともに、バリアフリーや省エネの観点から建物内外の改修・補修を実施。生まれ変わった体育館と武道場には、誰もが使いやすく地球にもやさしい、安全で快適な環境が広がっています。



東山・鶴舞両キャンパスで、 さまざまな環境整備を推進

上記の施設以外にも東山キャンパスでは、次世代自動車の材料開発研究拠点として名古屋大学グリーンビークル材料研究施設を新設。産学連携のためのオープンスペースを設置すると同時に、高度なセキュリティシステムを導入して機密保持にも万全を期しています。また、より快適な学生生活をサポートするために、老朽化した南部食堂を全面改築。カフェテリア食堂や複合食堂などを設け、旧食堂の2倍強の

収容人数を確保しました。

一方、鶴舞キャンパスでは、名古屋大学医学部附属病院新外来棟および周辺環境の整備が完了しました。検討段階から含めれば、実に20年を越えての計画の実現となり、充実した施設設備の中で、これまで以上に大病院の理念である診療・教育・研究を通じた社会貢献に取り組んでいきます。

今後も名古屋大学では、自由闊達な研究・教育風土の基盤となるキャンパスの整備を進めていく予定です。

世界へ、羽ばたく。

創立以来の伝統である自由闊達な学風を原動力に、
研究と教育の両輪を明日へと回し続け、世界屈指の知的成果の創出と、
世界の未来を担う人材の輩出を推し進めてきた、名古屋大学。
伝統の継承と、絶え間なき前進。
伸びやかなキャンパスに息づく二つの思想は、
グローバリズムの時代にあって、ますます輝きを放っています。
名古屋大学から羽ばたく若い力たちは、
これからも確かな足跡を、世界に刻んでいくはずです。

名古屋大学 プロフィール 2011

発行年月/2011年7月 企画編集/名古屋大学広報室
〒464-8601 名古屋市千種区不老町
Tel 052-789-2016 <http://www.nagoya-u.ac.jp/>